

【富山税務署長賞】

「当たり前」の日常とは

富山県立富山商業高等学校二年 相野 舞海

「おはよう」から始まり、眠たい目をこすりながら受ける授業、放課後に仲間と走るテニスコート、そして「また明日ね」と言える毎日がどれほど幸せなものなのか、昔の私は考えたこともなかった。

でもある日、「それ全部、税金で支えられているんだよ、感謝の気持ちを忘れないように」顧問の先生が言った。その言葉を聞いて私の心の中の何かを変えた。ただ走って、打って、笑っていた毎日が、誰かの支えの上にあると知った。授業が受けられて当たり前、部活動ができて当たり前、学校の設備だけでなく、教科書や備品、水道、電気が使えることは当たり前だと思っていた。しかし、それは、たくさんの大人たちが未来のために納めてくれる税金があるからこそだった。そして当たり前だと思っていた日常は、当たり前ではないということを知り、見える景色が変わった。

私は、今までの人生の中で何も考えずたくさんの「当たり前」に囲まれて生きてきた。でもそれは、誰かの想いや努力を税金という形で渡し、続いているものだった。

眠い授業に文句を言った日もあった。部活動のやる気が出ず、手を抜いた日もあった。でも今なら思える。それすらも誰かの優しさが形になったものだったって。

もし学校に行けなかったら、もし部活動ができなかったら、こんな毎日は、きっと味気なくて寂しくて、前を向けなかったと思う。私も将来、働いて税金を納める。そのときは義務としてじゃなくて誰かの「当たり前」を守る人として、自信を持って納めたいと思う。今日も眠たくて、部活動のやる気がおきなくても、全部がある日々がありがとうって思えるようになった。そして、「また明日ね」と言える日常がどれだけあたたかくて大切なものだったかを当たり前みたいに思っていた今日にしっかりありがとうって伝えたい。だからこそ人生を大切にしようと思った。感謝の気持ちを忘れずに生きようと決意した。「また明日ね」そう言える日が一生続きますように。